
いのちの長さ・重さ・深さを考える～アフリカ・ケニアの療育現場から～

公文 和子

シロアムの園(ケニア国ナイロビ市) 代表

持続可能な開発目標 (SDGs) は2015年に定められ、2030年までに様々な地球規模課題目標を達成することを通して、「誰一人残さず」未来のある子どもたちが笑顔で成長できる世界を目指している。しかし、現実に子どもたちの置かれている環境は、貧困、戦争、不公平、虐待など、子どもたちのいのちが守られているとは言い難い。経済が発達し、色々な制度があり、様々な機会が保証されている日本の子どもたちも必ずしも幸福であるわけではない。

演者は、戦禍にあるパレスチナやシエラレオネの難民キャンプでの仕事の中で、いのちの長さや重さを深く考えさせられた。その後2002年から東アフリカのケニア共和国において、様々な保健分野の仕事に従事する中で障がいのある子どもたちと出会った。この子どもたちを中心に置き、子どもたちのいのちが輝く社会を目指して2015年、障がい児の包括的ケアを目指す事業「シロアムの園」を設立した。

ケニアの障がい児の殆どが、適切な医療や教育を受ける機会を得ることができず、社会保障・福祉・医療保険制度の不備により、経済的にも追い込まれている。更に、地域社会における迷信や語り伝えなどにより差別偏見も強く、地域・家族の問題を多く抱えている。それにより家族崩壊が起こり、更に貧困が進み、精神的・社会的問題が助長される。そして、インフラ未発達や社会参加機会が乏しいため、差別偏見と合わせて、多くの子どもたちが家に閉じ込められている現状がある。

シロアムの園はこのような子どもたちやご家族に寄り添い、真のニーズを共に考えつつ、リハビリ、医療、教育、心理、社会的など様々な通所サービスを提供する。子どもたちやご家族にとっての居場所をつくり、それぞれが特別で大切なひとりであることを感じるように共に歩んでいる。また、子どもたちの生きる社会は、日本とは違う文化や制度の背景があり、さらに急速に進む高度経済成長期において、子どもたちを中心にみんなが笑顔で共に生きることができるケニアらしい社会をつくるというビジョンを掲げている。

本講演においては、症例を通して、いのちの長さだけではなく、重さと深さを考える。例え選択肢が少なく、客観的にみた困難が大きく、実際に短いいのちであったとしても、子どもたちのいのちが尊ばれ、豊かに生きるために、家族や社会の役割を考え、子どもたちが「深いいのち」を豊かに生きることを意味を考える。